

沖縄県立博物館・美術館

正会員 能 勢 修 治 君

当建物は21世紀のグスクをイメージした外観を有し、沖縄・琉球の独自の文化・歴史を継承、発信していく施設として、その役割が期待されている。10年前の公開コンペで選定されたが、県の財政悪化により6年間の中断があり、その後関係者の努力によりさまざまなコストダウンが図られて実現にこぎつけたプロジェクトである。

建物全体の構成は、箱を積み重ねた形状の建築本体とその外壁を被うプレキャストコンクリート版(PC版)の外皮、エントランスホールを覆うツリー状柱に支持された鉄骨架構の3部からなっている。建築本体は300mm厚の柱内蔵壁を基本としたシンプルな構造で、展示室・収蔵庫廻りの躯体内面の凹凸を無くし耐震性能向上にも効果がある。

最も印象的なのは、本体に斜めに設置されたダブルスキンとなる外皮のPC版で、グスクの柔らかい曲線を表現し、強烈な日射の熱負荷を遮断したり、外壁や開口部を暴風雨から保護したりする役目を担っている。PC版の素材は白セメント、琉球石灰岩および海砂(サンゴ)で、その表面をラフに削り琉球石灰岩に近い優しい質感を醸し出し、周辺の景観を和らげ新しいランドマークのデザイン要素となっている。また、エントランス周りのPC版から木漏れ日が入るスペースは、沖縄独特の交流の場をイメージされた神聖な空間を創出している。

エントランスホールの鉄骨屋根は、クバ(沖縄に原生するヤシ科の植物)をモチーフとしたツリー状の柱で支持され、造形的にも巧みでオリジナリティの高いデザインとなっている。柱はテーパー鋼管、鋳鋼、熱押型鋼およびフラットバーで構成され、そのディテールは構造的にも意匠的にも十分吟味され、明るくて新鮮なイメージを与えている。

地球環境保全に対する配慮として、例えば、エントランスホールでの柱頭デザインに組み込まれたトップライト、可動ミラーを利用した展示室の自然光採光、ダブルスキン外壁による日射熱の低減、水資源の有効利用を狙った雨水や中水利用など、自然エネルギーを積極的に利用している。また、空調システムにおいても、氷蓄熱システムは勿論、床吹出、緩やかな床放射冷房、幅木吹出しや階段蹴上げ吹出しとガラスの腰板を組み合わせた居住域冷房など、慎重な配慮がなされた「沖縄風土に対応する環境技術」が多く採用されており、まさに vernacular 建築の代表と言える。

来館者および建物管理者の評判も高く、次世代に継承されていく施設を実現した設計者の手腕に敬意を表したい。

よって、ここに作品選奨を贈るものである。